

講演会（第 62 回例会）

演題：福井県アイバンクの活動と移植医療への理解

実施期日：平成 30 年 2 月 22 日（木）

会場：アオッサ 706,707 号室

講師：福井県アイバンク移植コーディネーター部長 平澤ゆみ子氏

参加者：62 名（内新会員 2 名）

ご本人の略歴。 現在日本組織医学会認定の福井県臓器移植コーディネーター、福井県アイバンク移植コーディネーターの重責を担われる一方で、福井大学や金城大学で非常勤講師を務めておられる。福井県済生会病院主任看護師。

講演内容。

講演に入る前に DVD を鑑賞した。あらすじは以下のようだった。

今はともに成人している浩介・由美（兄妹）、晋一だが、幼少時は隣同士で、まるで 3 人兄弟のように育った仲だった。数年を経て突然晋一は浩介を訪ね、由美が交通事故で死亡したので、由美の意向に沿って献眼の了解を欲しいというものだった。浩介は晋一の突然の訪問にも驚いたが、妹の献眼の件は兄の自分にさえ寝耳に水だったので全く動転してしまった。しかしアイバンク移植コーディネータの冷静な対応と、妹の人の役に立ちたいという真摯な気持ちに心を打たれ、不承不承ながらも了解の決断をした。

しばらく経ったある日見知らぬ小さい女の子から丁重な手紙を受け取った。生きる希望さえ失せていた少女が見知らぬ人からの善意の行為に感謝する手紙で、浩介も自分の判断が妹の意向をかなえた喜びと、自分の判断が正しかったことを満足するという内容のものであった。

氏は手術室主任看護師として、「目は大切なもの」との信念に基づき、30 万人ともいわれる目の不自由な人に、角膜移植で目が回復するのであれば何と素晴らしいことだろうとの思いで、25 年間角膜提供者と目に疾病を持つ患者との間の架け橋的な仕事（アイバンク移植コーディネーター）の一役を担っているとのことである。

アイバンクが機能するには、各都道府県アイバンクから病院開発事業や地域啓発事業に情報提供や情報発信をしなければならない。いろいろなイベントを企画し一般の人の関心を高めるのである。「10・10 目の愛護デー」もその一つで、眼の無料相談を 2 時間程度、眼科医 3 人が診断にあたるのであるが、毎年約 100 名程度が診断に訪れる。昨年（平成 29 年）は 10 月 29 日（土）にエルパ 2 階のエルパホールで実施した。

また、当県は「ドナーファミリーの集い」なるものも実施している。これは眼球の提供者・受けた人の関係者に集ってもらい、「心のケア」をしたいとの思いで行う。これは全国でもまれで、本県は2番手である。また、提供者家族への感謝状と記念品（クリスタルコーニア賞）を贈呈する式典も催している。

角膜とは、ピンポン玉大の目の最も前にある黒目の前に付いている厚さ約0.5mm、直径約11mmの透明な膜で、1) 眼球の外壁の一部として眼球の形態を保持し、2) 外からの侵襲から保護し、3) 眼球内に光を導くためのレンズとして光学的に働く役割を担っている。ところがウイルスの感染や外傷等によって透明性が失われたり変形したりして網膜に正常な像を結べなくなると、角膜移植手術が必要となる。その場合は他人の眼球（角膜）をもらって角膜移植をすることになる。「私の目が役立つならどうぞ使ってください」というのが「献眼」で、その人はアイバンクへ登録するのであるが、その一方で提供者の家族の意思を確認する必要もあるのである。脳死が確認されると、その人の二つの眼球は二人の人に提供され、二人の人が光明の恩恵にあずかるのである。（一人の人に同時に二つの目が提供されることはないとのこと）

献眼には提供する権利、提供しない権利が平等にあり、受ける側にもまた同等の権利があって、四つの権利は平等に尊重されている。決して強制されるものではない。

全国で角膜を必要とする人は年3,000人を超えているので、足りない角膜はアメリカから輸入しているのが現状である。福井県でアイバンクに登録しているのは12,000人で、毎年100人の人が更新しているが、実数は検証しにくいのが現状である。臓器提供には通常年齢制限があるが、献眼の場合は制限はなく、福井県での最高提供年齢は103歳である。ただ、B型肝炎、C型肝炎の治療をしている人、目に癌がある人、及び白血病・悪性リンパ腫の治療をしている人は献眼できないことになっている。

角膜提供者の意思表示カードには「献眼登録用リーフレット」や「献眼登録カード」がある。保険証や運転免許証と共に保管することになるが、この場合は自筆署名が必要である。

世論調査では臓器提供・角膜提供の意思のある人が4割を超えているにもかかわらず、実際は提供に繋がっていない。理由は、終末期医療の現場から見ると、“提供する・提供しない”の判断を下すタイミングはその時しかないにもかかわらず、精神的余裕がないために自発的に提供を思いつくことがないからであって、だれかが家族にアナウンスしない限り臓器提供・角膜提供の意思を表に出せないのが現状である。

以上 大野 記

